令和４年度第２回　檜山圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会　議事録

日時　令和 5 年 1 月 19 日（木）
13:00～15:00
場所　檜山合同庁舎　4 階講堂

１．開会

（菊池主査）

皆様お疲れ様です。時間になりましたので、令和 4 年度第 2 回　檜山圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会を開催したいと思います。前回が 8 月 21 日で、今年度から始まった委員の方もいますので、一通り自己紹介などしたんですが、今回石田委員が来られて、初顔合わせとなる方が多いかと思われますので、一通り簡単に自己紹介をしたいと思います。

※一同自己紹介
※資料確認

２．議題（１）
当委員会に寄せられた質問事項への対応（障がい者の移動支援について）

（菊池主査）

それでは議題の方に移らせていただきます。今回、議題（１）（２）はこちら事務局の方から説明と紹介をするような形を取りまして、（３）は地域課題に対する事例の提供が今西コーディネーターからありましたので、皆さんで意見を出し合ってもらう形を取ろうと思っていますので、よろしくお願いします。

（１）番の「当委員会に寄せられた質問事項への対応（障がい者の移動支援について）のご紹介をします。

資料の 1 枚目に概要が書かれていますが、前回、第 1 回目の委員会をやっていた 8 月の 21 日に一般の方からメールがありまして、内容としては「檜山地方の介護タクシーの状況について教えてほしい」と。廃業した事業者も多く、地域の足になるものが減ってきているのではないかと危機感を持たれた方のようで、地域ではどんな形で障がい者の移動支援を行っているのか教えて欲しい、とのことでした。

回答としては、事務局の方で運輸局に問い合わせをしまして、介護タクシーや福祉有償運送の登録台数を確認したり、その他に管内の各町でも、タクシーチケットを発行している等独自の移動支援のサービスを持っていますので、そういうものを取りまとめて確認してお

ります。その他に北海道の行っている事業として、腎臓機能障がい者の通院交通費の助成という、人工透析の患者さんに対する助成制度がありましたので、そういう情報をまとめてお送りしています。併せて、函館の医療機関で患者バスを出しているとか、町内でも薬局が薬の処方をした後に患者さんを送迎するといったサービスがありましたので、そういった情報提供をして、最終的には 9 月 10 日にご理解をいただいています。運送業をやっている方とのことで、参考にしたいということで納得していただいた形となりました。

枚数が何枚かありますが、2P と 3P が質問者の方、一般の方から来たメールになりまして、その後何度かやりとりがあった後、4P が回答した際のメールになっています。5P 以降がこちらで確認しました移動支援の事業、サービス等になります。

（資料紹介 P1-5 から 1-8）

ここまでで議題の（１）となります。この話の中で、疑問や確認などはあるでしょうか。

（各委員ともない様子）

今現在の情報をまとめたものになりますので、変更があった時は各町の HP を確認していただければと思います。たとえば知り合いでこういうサービスが使いたい、助成の制度を使いたいという方がいれば、紹介していただければいいかなと思いました。

３．議題（２）
市町村等の制定する条例・規則に係る精神障がい者を対象とした制限条項の存在について

（菊池主査）

引き続き、議題（２）に行かせていただきたいと思います。

議題（２）は、「市町村等の制定する条例・規則等に係る精神障がいを対象とした制限条項の存在について」ということで、P2-1 と P2-2 がセットのページとなります。

どういう話かと言いますと、秋田県の大仙市という市の議会の話になるんですが、去年の 6 月 3 日の記事で、県内の議会の傍聴をする時の規則で、差別的な書き方をされていると。「精神に異常があると認められる者」は傍聴を認めませんという文章があったというのが、最初にニュースになっています。

その次のページを見ていただくと、同じ新聞で 8 月 11 日の記事が出ていまして、8 月 10 日にその条文を削除する、という改正を行っています。

ここがおそらく発端かと思われますが、その次の「おりふれ通信」という冊子を見てください。本州にある精神障がい者の当事者団体の、そこの会報のコピーになります。ここの団体が、前段の秋田県大仙市の話を受けて、全国の各自治体の規則や条文を調べたところ、同じような差別的な条文、「精神障がい者」や「精神に異常がある者」という表現や、「傍聴を禁ず」と、立ち入りを禁じますというような条文が散見されたというのを、この会報の中で

ピックアップしているという形になります。

P2-5 に、この団体が調べた一覧があるんですけれども、全国だと 460 件、北海道が 81 件ですね。議会の規則ですとか、あとは教育委員会が全体に多いようですね。正確な文言はここでは分からないんですけれども。あと、庁舎の立ち入りの部分で引っかかっているものがあるようで、こういう差別的な表現がありましたということで、当事者団体の方が情報発信をされております。

これを受けて、道の方でも、これから調査なり対応なりをしていって、各町の条文を調べて、改正なり適正な対応をしていただくという流れになっています。具体的な話はこれから動き始めるので、次回、来年度の委員会の中で報告できるかなと思っています。

条文自体は、古い時代だとそうした差別的な表現があったのかという気はしますし、地域ごとに順次改正をされていって、（今まで）目が届かなかったものが残っているのかと思いますが、これからの調査待ちになるかと思います。

議題の（２）はこういう形でのご紹介となりますが、皆さん何かご意見や、気になる部分は大丈夫でしょうか？

（大口委員）

言葉の問題で、色んな差別的な表現の仕方が変わってきたというのは分かるんですが、最後の「知的障がい」という言葉は私も普通に使っている気がするんですけれども。

（菊池主査）

2-4P、これですね。ここは今、「害」の字が漢字ではなくひらがなにするようになっている、という部分がひょっとしたら引っかかっているのかも知れないですし、5 番のタイトルが、「狂人、瘋癲者、白痴者、精神錯乱、知的障害者」は傍聴することができないと、「傍聴することを禁じる」という部分で引っかかっているのかも知れない、という感じなんです。言葉だけの話なのか、文脈なのかというのが、この（話の）中だとそこまでは読めないので、そこがどう落ちるのか分からないところはあります。

とりあえず、「しょうがい」という言葉そのものが駄目だというのは、今のところないので、この経緯、どういう風に問題視されてどういう風に直されたかというのが見れれば、分かってくるのかなという気がします。

４．議題（３）
地域課題「8050」問題について

（菊池主査）

続けて、三番の地域課題「8050 問題」に進ませていただきたいと思います。

前回の議事録は（各委員に）送ったので、石田さんも目は通していただいているかと思うんですが、内容的にシンプルな話ではないので、軽くおさらいをしようかと思います。

「8050」問題というのがですね、80 代の親御さんと、50 代の引きこもりの子どもが家に残されている、そこで社会から孤立したり、50 代の働ける年代の子どもが引きこもっていることで経済的に困窮したり、というケースが近年見られることから、最近出てくることになった問題になります。

檜山は高齢化もありますし、（地域を）見ていてそういう状態像、50 代の引きこもりの息子がいるケース、というのが見られたので、この委員会の中でそういったケースに対する認識だとか、支援を考えるヒントになれればということで、前回地域課題として上げさせてもらいました。

ただ、一般的な 8050 問題はこういうものがありますと、そこにどう我々が関わろうかという中で、必ずしも今、障がいのサービスとつながっているケースばかりではなく、たとえば若いうちに何か障がいの兆候があったのではないかとか。障がいでなくても、何かしら周囲で、地域として支援をする手立てがあったのではないかと、いう方向の話が出まして、単純に今 80 代と 50 代の家族を発見して見るのではなく、将来的にそういったリスクに陥らないように広い年代、若いうちからそういうものを意識した方向性の支援を行えれば良いのではないか、という方向に、前回の話はなっています。

今回、事例として 1 ケース用意させていただいてます。ちょっと脚色は入っていますが事例ということでコーディネーターの方からいただいて、檜山の地域でよく見られるであろう 8050 のケースというのを上げて、その事例を通じて皆さんにこの 8050 問題というものを一度考えていただいて、今後の対応・対策なりを考えていければと思います。

（今西地域づくりコーディネーター）

今西です、よろしくお願いします。

このケースには皆さん先ほどから目を通しておりますので、ざっくり読んでみて「ああ、私の周りにもいるかな」とか、自分たちが関わった方の中にもいるかな、とか、そんなに極端にすごい課題・重いケースではないと思います。本当に身近にいる方で、周りを見渡したら「あ、いるね」ていうケースだと思います。

私も、今金の相談支援事業所ひかりで相談員をしているんですけども、今年で 14 年ですね。これだけ長い間地域で相談員をしていますと、かなりこういう潜在していた家族といいますか、ご本人さんといいますか、かなりの方々に出会ってきました。今菊池さんがおっしゃったように、（事例は）そのまま載せてはいませんので、事例を提供する時はかなり配慮しなければいけませんので、ちょっと実際と違うところもありますが、皆さんも何度も事例検討や事例提供で出会っていると思うんですが、「この人は誰なんですか」ということを探す目的はありません。このケースを基本として、皆さんの中で当てはめていっていただきたいし、ご本人さんというよりも背景に皆さん注目して、進めていけたらいいかなと思っています。

それでは、簡単にこのケースの概要説明をしていきたいと思います。

（何か所か）白テープで見えなくなっていますけれども、ここのところは今はあまり考えず

に、御本人さんの年齢、生い立ちと、状況というところを中心に、お話していきますので、そこに注目をしていただきたいと思います。

事例提供する家族ですね、家族構成は、父親が 88 歳、母親 85 歳、兄が 51 歳で、ご本人さんは今 50 歳。男性の方です。

○○町で出生しています。家族は両親と兄ということで、お家が農家をしているということで、ここに祖父母がいる、というような家族構成でした。

小学校は普通学級です。中学校も普通学級へ進んでいました。多少、勉強の遅れはありました。非常に性格が穏やかで、大人しいお子さんだったということで、あまり目立つようなお子さんではありませんでした。周りから助けていただきながら仲良く過ごしていたということで、みんなの後ろからついていく、というような、大人しいお子さんだったようです。

学校が小さな学校だったものですから、先生方の目も行き届いていた環境の中で、小中学校を過ごしていたようです。一般の男の子といいますか、皆さん野球部に入るので、自分もいっしょにやりたいと入っていたようですけども、選手にはなれなかったようです。特に心配・問題があったとか、行動的に難しいお子さんでしたっていうようなそういう記録もなく、お母さんも「そんなに大変な子ではなかった」という記憶でした。

高校進学を迎えまして、やはり勉強がちょっと遅れていたので、高等養護学校と普通高校どちらに進むか先生方も悩んだところが多少あったようですが、何とか普通高校ということで。定員割れしている高校も町にありましたので、そこに進学しても入学は大丈夫だね、ということで、普通高校に友達と一緒に入学をした、ということです。

あまり友達とあっち行ったりこっち行ったり出かけることはなかったようで、休みの日はお家の手伝いをお母さんと一緒に。お母さんにあれしてこれしてって言われると、何となくお手伝いをしている感じだったそうです。高校に入って、みんなと一緒に運動部に入ったんですが、やっぱり体力的に厳しいところがあったみたいで、厳しい練習にはついていけなくて、辞めてしまったということがありました。

で、3 年後ですね、高校を何とか進級はできまして、3 年で卒業を迎えたということです。卒業の時期が来まして、なかなか就職試験を受けても決まらなかったということで、段々と卒業も近くなり、追い詰められるようなところは多少あったようです。親の方でも「何とかしなければ」と、どこかに就職させたいという思いもありまして、親戚に声をかけたり、色々動いてくれたようで。親戚の伝手といいますか、工務店の方に就職が決まって、ギリギリで就職が決まったような状況でした。

ちょっとここ、資料の間が空いているんですけれども、ここまでが「家族と一緒に暮らした時期」ですね。その後家を出て、次のステージといいますか、生活が大きく変わった時期になると思います。

続けて説明させていただきます。

就職、何とか決まりました。家からちょっと離れた所でしたので、少し大きな街の方に就職が決まりました。ですから自ずと家から離れることになりまして、アパートで一人暮らし

を始めました。ご本人さんの思いですと、やっぱり家から通える所に就職したかったという思いは、はっきりと親には言わなかったけれども、思ってはいたということです。「就職しないでどうするの」とか「働かないでどうするの」というのは、親御さんなり周りから、そういうプレッシャーみたいなものを本人もかなり感じていたようで、どこにも行かないわけにはいかないっていうのが心の奥にあったようです。

でもやっぱり一人暮らしを始めたら、食事を作る余裕なり、本人もそう余裕がなく、自分の日常生活ですね。そこが段々と乱雑になっていくところがあったみたいで、コンビニのお弁当を買ってきて食べるっていうのが精一杯だった、みたいな感じです。あまり人付き合いとかもこう、幼少期から考えても、自分からお友達を誘うとか「どこかご飯食べに行こう」とか、そういうようなことができる方ではなかったようです。で、一年少し働いてやっぱり仕事になじめず、人間関係でも仲の良い友達ができなかったこともあって、仕事を辞めてしまいました。

ただ、辞めてすぐ家に帰るという選択肢はやはりなかったようで、アルバイトをしながら何とか単身生活を続けていました。それが3〜4年と、本人なりにはかなり頑張ったようで、家族からの支援も多少はあったと思います。きっとお母さんでしょうね、お母さんの方でサポートしてくれてたってことがあったのかなと思います。

それから、右の方のページになります。またライフステージが変わります。「家に戻る」という選択になりましたので、7年くらいの単身生活の後で実家に戻るという選択をしました。

25歳で家に戻りまして。戻った大きな理由としては、金銭的にも生活が苦しくなってしまって、家に戻る決意をしたということです。親御さんの方ももう、そんなに支援、サポートできないよねということで、お家に戻ってきたら？ということもあったようです。家に戻ったら、お家は農家ですから仕事はありますので、お父さんお母さんの手伝いをしていたようです。

そういう生活がちょっと続きまして、やはりこう精神的に、本人なりにもかなり追い詰めていたところがあったようで、吐き気や過呼吸の症状がみられるようになりまして、自分でこのままではいけないと、不安も強くなって、精神科を通院しています。診断はパニック障害・うつという診断を受けました。

それが30歳の時で、その次の段に相談支援事業所、相談員に相談となりますが、ここが初めて外部との接点といいますか、初めて外部の人の名前が出てきたといいますか。その時に相談室に来た大きな理由というのが、働きたいという本人の思いはあるんですけれども、やはり仕事やめてからこれだけ経っていますので、ちょっと自信もないし。お医者さんの方から、福祉事業所の利用というのも考えてみてはどうですか？と勧められたということで、ご本人さんが相談支援事業所の方に相談に見えたということです。で、色々と相談員の方と相談をしまして、福祉サービスの利用につながりました。B型事業所を最初利用していまして、かなり能力的にも高く、性格もとても穏やかということもありまして、就職につながる

のではないかということで、事業所から職場実習につなげていった経緯があります。でも、いざ働くとなるとやっぱり自信がないということで、ご本人さんも一年ほどでそのトライを辞めてしまっています。

B 型事業所の方は 1、2 年続いたと思うんですが、そこもずっと続きはしませんでした。通院はずっと継続していたので、お医者さんの方から「知的障がいがあるのではないか」ということで、検査をしてみませんか？となり、検査をした結果、療育手帳 B に該当するという結果が出て、療育手帳を申請しています。その段階で相談支援事業所とはつながっていたので、色々と申請の手続き等はこちらでお手伝いしたと思います。

その後、手帳を取った後ですが、B 型の事業所は辞めています。お家の手伝いをしながら、相談支援事業所の方には何度か連絡が入ってたり、来所したりということは続いていました。その時にご本人さんからは「障害基礎年金について」ということで相談されています。何故？という話をすると、療育手帳も申請しましたし、働けない、収入がないということで、家族に自分が迷惑をかけているということで。少しでも家族への負担を少なくしたいけど、今は働けないので年金の申請をしたいと。そういう相談がありましたが、結果的にはそれは手続きまでには至らず、その後段々と連絡も途絶えがちになって、現在はほとんど相談員の方に連絡は入らないという状況で、引きこもり状態になっているのではないか？という。ざっくりと概要を説明しますと、こういうケースです。

どうでしょう皆さん、こういう方いますね、という思いで聞かれたかと思うんですけども、この表の右の方に、家族を含めた背景というものがありますね。説明はしていなかったんですが、きっと皆さん、私の説明の流れのままそちらの方も目を通していただいているかと思います。

そこの部分を含めると、小さい頃は本当に手のかからないお子さんということで、一歳違いのお兄さんがいたので、いつもお兄さんと一緒に行動をしていたというような。そんなに、何が・どこが心配？というような大人しいお子さんだったようです。お父さんはちょっと厳しい方だったみたいで、お母さんがこう、そこを庇うような感じで。お家にいる間、学校を卒業するまではそういう生活をされていたということです。「ステージが三回変わっている」ということで、お家で家族と一緒に暮らしていた 18 歳までが第一段階ですが、ここまでは特に問題はない、明確な課題も上がっていないという状況です。皆さんからご意見、ご質問があれば答えられる範囲で答えますが、家にいた 18 歳までで、何か皆さんからのご意見等はありますか？

（大口委員）

小学校、中学校は小規模校だったということで、多分先生がたやお友達も含めて色んな人たちが見守ってくれていたというか、支えてくれていたと思うんですよね。そんな中で、16 歳で普通高校に入ったと。そこでの質問ですが、その普通高校というのは本人の希望だったのでしょうか。

（今西地域づくりコーディネーター）

強い希望ではなかったですね。流れのままに何となく、親も「受かるんじゃない？」みたいな感じで。友達も行くので自分もそっちに行きたいというような。特別支援のクラスに入ったことがないお子さんなので、そういう選択（高等養護学校）というのは先生方から言われたら「何で？」という疑問が沸いたんじゃないでしょうかね。それで普通高校ということで、迷いもなくそっちの選択になったのかなと思います。

（大口委員）

もうひとつ。父親は厳しかったということなんですが、どういう風に厳しかったのか。たとえばしつけの面…しつけや色んなマナーとかに厳しかったのか。できないことも色々あったと思うんですけど、それに対して「なんでお前はできないんだ」みたいな厳しさなのか。そのあたりはどうなんでしょう？

（今西地域づくりコーディネーター）

そうですね、高校で運動部に入ったけども辞めたってこととか、中学校の時も辞めちゃったとか、結局その「なんで続かないんだ」っていう、すぐ諦めてしまうことに対して、親は厳しかったみたいですね。頑張らないというか…もうちょっと頑張りなさいとか、すぐ駄目だって諦めてしまうなとか、そういうような見方と言うんですかね。（親自身の）年齢からいっても、考え方もちょっと古いと言いますか。やっぱり「男の子はこうじゃなきゃ」みたいなところでお兄さんと比べたりして、「どうしてお前は駄目なんだ」みたいな、そういうところはあったみたいです。

（松田委員）

私、ここまで見たところでは、「わりとよくあるケースかな」と思っていて、こういう人って結構いるよね、というのが印象なんですね。根っこにはもちろん幼少期の何かがあるかも知れないけれども、この時点で将来的にこういう問題に発展するとか、そういうところを見出すのは正直難しいだろうなっていうのは思います。この後どういう風なことがあったのか。隠れてる部分もあると思いますけれども、そういうところから（兆候を）見つけていくのしかないのかな、という印象です。

（小野寺社会福祉課長）

今お話があったように、まぁよくあるケースというか、何となく見たことがある、という感じもあったんですけども、例えばこの 18 歳までの段階で、関係機関が関わるような可能性というのは何かあるものなのか、先ほど言われたように、何事もなく年齢が上がっていってもおかしくはないのかなって感じるところではあるんですけれども、この段階で何かそういう関わりの可能性があれば、教えていただければと思います。

（今西地域づくりコーディネーター）

委員の方からは、何か今のお話に対してありませんか？

（大口委員）

私ずっと教員をやっていたので、ここがやっぱり一番気になるというか。佐藤先生もありますよね？小学生でも、ずっと「お前は何でできないんだ、何で頑張れないんだ」と言われ

ると、自己肯定感がどんどん低くなっていくんですよね。この方は小中学生の時はまだ小規模校ということで、それほど強く言われないというか、支えられながらきたと思うんですけど、でもお家ではきっと、「何で兄はできるのに弟はできないんだ」とか、「野球部で練習してるのに何で選手になれないんだ」とか。想像ですけど、そういう責められ方をしていたかも知れないっていうことは想像できるし、そして高校には入ったけれども、やっぱり普通高校ということで、なかなか他の友達と一緒にはついていけないということになったのかなと。今ですと、小中学校は支援員という形で特別な配慮をしてくれるようにもなってますけど、現在 50 歳だとすると、その時代の学校というのはまだそういう支援がなくて、そういう「何で自分はできないんだろう」で悩んでいるところにさらに「何でお前は頑張らないんだ」と言われるのは、それはちょっと…苦しくなっていたのかなっていう気がします。（佐藤委員に）すみません、付け足してください。

（佐藤委員）

私も、表の前半を主に見ていたんですけれども。転機となったのは 18 歳の時、親元を離れて、一人暮らしをして自立した生活となった時に、ここで一つ壁があったと思うんですよね。これまで、小学生中学生の時には家族がいて、厳しかったかもしれないけど支えがあったり、近くに友達がいたと思うんですが、いざ一人で暮らすとなった時に、暮らしていくこともそうだし、何かが起きた時の対処の仕方とか、自立して生活するってことに対して困難さを抱えてしまったのかなと思います。今の時代とは少し違うのかも知れませんが、今学校で働いている身としては、ここの幼少期、小学生中学生というところを大事にしなきゃいけないなというのは感じています。

（今西地域づくりコーディネーター）

今、みなさんの意見でも、時代が…今 50 歳ということで、この方が小学校に行っている時と考えると 30 年～40 年前ということになっちゃうんですけども。

今現在、私が相談員をしていて、この年代でストップする、つまづくというお子さんからの相談が毎年あります。普通高校に行き、特別支援のクラスにも（行った経験がなく）…本当に、全く同じケースですね。高校行きました、就職できません、どうしてでしょう？と言った時に、そこで初めて相談員のところに足を運ぶという生徒さん、お子さん親御さんは毎年いるんです。これだけ時代が違ってもまだ、支援を受けずに 18 歳まできて、ここで現実にぶつかり、社会に出れない、自立できない、働けないという大きな壁にぶつかって、そしてこういう相談機関と関わっていく。というケースは毎年あるんですね。だからこの、守られてといいますか。大口先生が言ったように、確かにこの文章だけ読むとそんなに心配なお子さんではないんですけども、結局この、小さい時からの自分で決めること、佐藤先生がおっしゃったように自分で決めていく、自分で考えて生きていく、判断していくという、基本となるベースのところの積み重ねができてないまま、18 歳になりましたと。その時のこの、壁の高さというのがすごいんだろうなっていうのが、私も相談員として感じるところではあります。

（松田委員）

自分で壁にぶつかって、相談してくれるのはまだいいと思うんですよ。ただこれを客観的に見ていたら、やっぱり「ああ、いるいる」っていう。私もたくさん見てきたし、もちろんこういう経験を積んだ人でも何の問題もなく大人になっていく人もいるし、もちろん中にはつまづく人もいると思うんですよね。この段階で、自分から助けを求められる人であれば、それはもちろん手を差し伸べていくべきだと思うんですけれども、この段階で、外部から見た時に、「この子すぐやめちゃうけど、何か手を差し伸べた方がいいんじゃないか」というのは、立場にもよりますけどそれが公的機関であればあるほど難しいと思うんですよね。そういう意味で、この段階で何らかの手を差し伸べるというのは、私は難しいような気がしているんですけれども、そこはどのように考えればいいでしょうか。

（大口委員）

特に小中学校でいうと、外部から「何か問題があるから」手を差し伸べるということではなくて、日常生活の積み重ねだと思うんですね。例えば、私は今学童保育に勤めていますけれども、学童というのは特別に何か資格がある人が支援員になっているわけではないんですね。一応研修は受けて、支援員認定書みたいなのはあるんですけど、特別に障害について学んできて支援員になるっていう人たちではないんですね。そういう人たちを見ていると、「この子のためにいいだろう」ていう風に、ちょっと言い過ぎかも知れないけど余計な手を出しちゃうというか。ちょっと待ってたらできるかも知れない、あるいは「この遊びとこの遊び、どっちがいい？」ていう風に選択させるとか。それをさせないで、「多分この子はこっちの方が喜ぶんじゃないか」と勝手に決めて差し出しちゃう。そういうことが、ずっと人から与えられる・人からやってもらうのを待って大きくなっちゃう、自分で判断することが全く経験なく次に行ってしまうということなので、特別支援をすることじゃなくて、日常的なそういう場面を作っていくというか。そういうことかなと思います。

（松田委員）

そうすると極端な言い方になるかも知れないけれども、国民全員が、できないことに対して「駄目だ」とか白黒言わないような土壌・環境を作っていきましょう、という感じになるんでしょうか。

（大口委員）

そういう意味で、30 年 40 年前よりかなり社会の認識は違ってきてると思うけど、まだまだ「障がい者は特別だ」っていう風な。「これとこれ、どっちがいい？」ていうのは、健常児には普通にやっていることなんだけど、そこはやっぱり障がい者は特別な目で見て避けてしまうというか。「助けてあげなきゃ」みたいな気持ちが、まだ国民…というか私たち一般人の中に持っているので、そこが足りないところ、まだまだ浸透していないところかなと思いますね。

（菊池主査）

自分は以前児童相談所にいたので、多少こういうご家庭の感覚が分かるかなと思うんで

すけれども、実際、外部から家庭に立ち入るのってなかなか難しいです。この段階で、児童相談所が何もないのに入るっていうのはやはりないですし、大体問題のみられるお子さんかなっていうのは、小中学生だったら学校から、それ以前で保育所に通ってると「ちょっと様子おかしいんだけど」と保育士さんから話が来たり、そういう身近に関わってる人が何か発見するのが多いと思います。

で、そこから次、やっぱり親なんですよね。親御さんにその情報を入れて、親御さんが「そうだね」って認識してくれるかどうかに、大きな壁がある感じです。今回、このケースは35歳の時に療育手帳をとっているので、知的な能力は後天的に下がるということはないので、この段階（18 歳まで）で何か問題はあったと思うんですよ。恐らく、学校はそれなりに気づくタイミングはあるんでしょうけど、そこから家族を説得して親御さんが「そうなんだ」となるかにハードルがすごいありますし、あとやっぱり小規模校だからというのも含めて、周りから守られているから何とかなっちゃうっていうのも、後から見るとマイナスになっちゃうかなっていうのはあります。結局、子どもはまだ発達過程なので、18 歳まで制度上は子どもなので、その中で伸びる可能性というのはあるにはあるんですね。そこを踏まえると、この段階で「できない」と決めつけるのもできないし、そこは家族を含めてどう受け入れてもらうかというのが、すごい難しいところかなという感じです。

（今西地域づくりコーディネーター）

気づきといいますか、「あれ？」て思った方はきっと、この 18 歳の間で何人かいたと思うんですね。学校の先生が中心だと思うんですけども。ただ、幼少期のことを私もそんなに聞いてなく、ご本人さんもあまり嫌なことが記憶に残っていないみたいで、（具体的なエピソードが）ないんですね。後で療育手帳の申請ができる、したということは、この時点でも知的な遅れはあったはずなんですよね。ですからそこの部分が、今菊池さんおっしゃったとおり伸び幅がありますので、今すぐ手帳が必要とか、今すごく困っているというようには、この子は映らないで、そのまま 18 歳まで来たというところも、何の動きもない、記載されていないんですけれども、お母さんも「学校から言われたことがない」ということで、やはりそこは小さな学校で守られてきたというような学校生活だったんだと思いますね。

今の話どうですか石田さん、保健師さんの立場では。

（石田委員）

幼少期のことについては、時代ごとの関わり方もあると思うんですけど、今であれば多分、先に保健師が気づいてるんじゃないかなと思いますね。大抵は保健師が保育所に聞いたりしますし、ケース担当者会議でこの子の特徴を聞いたりだとか、どういうところが苦手かなとか、どういうところに支援が必要かなということは、早い段階で支援につながるのが今（の時代）ですね。ただ幼少期の話になると、さっきの話でもあったように、支援者側が気づいていても、やっぱり保護者（の意向）というところでなかなか支援に結びつかない。外部から手を差し伸べても上手くいかないというのは、今の時代でもありますね。「普通だ、普通だ」って言って普通高校に行ったけど、この子は将来一般就労できる子なんだろうか？

と思う時も、家族がその子を理解してもらわないと…結果として「やっぱりね」ということは、多々あります。そこに私たちが気づいていても何もできなかったというのもありますし、学校の先生とか（関係者と）連携して、できることはしていきますけども、限界があるかなっていうのは感じます。

（今西地域づくりコーディネーター）

たくさんご意見をいただきました。皆さんが考える時間といいますか、皆さんの意見を通してそれが広がっていけばいいなと思いますので、それでは次のステージに進めさせていただきます。

たった二行なんですけど、彼が一人になったという部分で、25 歳で家に戻るまで、7 年間の単身生活となります。先ほども説明の時に言いましたけども、他人と付き合っていく、職場の仲間と付き合っていくということがなかなか難しかったようで、本人は「しんどいから今日はちょっと行けないかな」と断ったことが、相手にしてみるとやはり「付き合いが悪いやつだな」と取られてしまい、ますます馴染めない、距離を縮めることができないという状態で。ご本人さんもおっしゃってましたが、仕事を辞めるまでの一年間は本当に苦しかったそうです。段々と職場に行く足が、毎朝の一歩が出なくなってしまって、精神的にもかなり辛くなってきてしまい、一年半くらいで仕事を辞めてしまったということでした。

その後、アルバイトで生活する時期が数年あったんですが…白い付箋を外してもらっていいですか。家族からの仕送りで助けてもらっていたんですが、お母さんがお父さんに内緒で仕送りをしていたそうです。だからお父さんは「一人でやっている」というか、「一人でやらなきゃ駄目なんだ」みたいな、そういう厳しさ・強さでお子さんを見ていたため、ここで相談する人がいなかったそうです。私が「誰かに相談しなかったの？」聞いたら、「いなかった」と。街には同級生もいたそうですが、そういう友達との付き合いも全くなくて、ただアルバイト先と家を往復するだけだったという話でした。「この間に病院に行くとか考えなかったの？」と聞いたんですが、精神科に通院するということを自分の中でイメージができなくて、風邪や腹痛で行くのとはやはりハードルといいますか、自分の中でその考えには至らなかったようですね。家族にもそういう相談はしたことがなかったということで。「お正月とかは帰ってたの？」と聞いたら「帰る時もありました」ということなので、家族と全く縁を切っていたわけではないと思うんですが、こんな状況の中で 6～7 年、一人でアパート暮らしをしていたということです。相談する人がいなかったというのが、この方の人生の中でと言いますか、このステージの中で一番しんどかったんだろうなという感じはします。

期間は短いですが。この期間について、何か皆さんの方から確認したいことやご意見などありましたらお願いいたします。

佐々木さん、どうですか？（障がい）当事者として参加してもらっているんですけど、この方を見て何か感じるところはありますか？

（佐々木委員）

何となく、分かるような感じはします。人間関係で悩むとか、職場の人と話すとか。

（今西地域づくりコーディネーター）

自分から友達を作るとか、仲間の中に入っていくって、やっぱり難しいですか？

（佐々木委員）

自分から話しかけるとか、そういうのはできるんだけど、人の輪の中に入って話すっていうのが、少し…。

（今西地域づくりコーディネーター）

たくさんの中に入って、話をするっていうのが（難しい）。

（佐々木委員）

やっぱり一人の方が楽ですしね。

（今西地域づくりコーディネーター）

一対一はいいけど、たくさんの中で自分が話をするっていうのが今でも難しいです？

（佐々木委員）

はい。

（今西地域づくりコーディネーター）

佐々木さん、今働いて何年でしたっけ？

（佐々木委員）

今で5年です。

（今西地域づくりコーディネーター）

グループホームを利用されてて、一般就労しているんですよね。どうですか、職場の仲間とは話ができるようになりました？

（佐々木委員）

一対一では。

けど、グループで固まっている中には、入ろうとは思わない。みんなと同じように接しようと思って。

（今西地域づくりコーディネーター）

自分がどこのグループに入っているとかは考えないで、みんなと、誰とでも？

（佐々木委員）

同じように。偏ったところの人とつきあうと、いざとなるとコミュニケーション取れなくなったりするから。ぎこちなかったりとか。

（今西地域づくりコーディネーター）

グループホームのメンバーとは大丈夫ですか？今四人いるもんね。

（佐々木委員）

あんま話さないです。どうもなじまない。

（大口委員）

グループホームということは、相談する人はいるんですよね？

（今西地域づくりコーディネーター）

食事を作ってくれる、お掃除をするスタッフさんは、朝と夕方に三時間ずつ勤務していますので、お話はできますし、光の里は地域での支援をしてくれる職員がいますので、担当している職員は、相談とか色々な部分でグループホームに訪問したり、緊急時は常に連絡を取り合えるようになっていますので、何かあった時にはすぐ職員に伝えることはできるね？

（佐々木委員）

はい。

（大口委員）

本当に、高校卒業した後のサポートというのはよく分からないというか、難しいなという風に思っていて。私の夫も中学校の教員やっていたんですけど、（※生徒の話？）中学校の時には特別支援学級に入っていて、高校も高等養護学校に行ったんですけど、「自分はここじゃない」って途中で辞めて就職したんですね。今でもたまに電話が来るんですけど、やっぱり「友達が欲しい」と言ってたりだとか…そこが一番大きいかな。本人は色んな勉強をして頑張ってはいるんですけど、そういう悩みを聞いてくれる人をどこに求めたらいいのかというのが、私も分からないし本人もきっと分からないんじゃないかなと思いますね。

それと、ちょっと戻っちゃいますけど、自分が分からなかったり困ったりした時には、人に助けを求めていいんだよっていうことをね、学校…高校上がるまでに経験というか、教えていく必要があるなって思います。

（今西地域づくりコーディネーター）

今の大口先生のお話を聞いて、佐藤先生どうですか。

（佐藤委員）

高校を卒業して働いた二年間、今の社会のシステムとして、この二年間のうちに何か気づけるものなのかどうなのか。本人からの訴えも特になく、相談する人もいなかったという中で、苦しかったこの二年間はどうしても避けられなかったものなのか。今の時代であれば何かそういう役割の機関やそういう方々はいるのか、もしあれば教えてください。

（今西地域づくりコーディネーター）

ご本人さんからの訴えというのは、やっぱり一番大きいですよね。まず本人から発信するか。そこができない、体験を知らないということで、それを一人で抱えている。「自分はできない、何で上手くやれないんだろう」というので、どんどんこう引きこもって行くような。確かにこの方の場合、ここでは障がいというものは何も出てこないんですね。遅れっていうのは何も出てなくて。ですから、周りも誰もそういう目で見ないと思うんです。ただ、この18 歳までの彼の…引き継ぎ、じゃないですけど、それを誰か（知っている人がいれば違ったのかも）。この、一人暮らしになった時点で周りの環境が全部変わりましたよね。そこに、誰からも何もその話が伝わるすべがないという。せめて同級生とかがつながっていると、けっこう「小学校の時にああだった、こうだった」みたいな感じで、それがもしかしたら職場の仲間に話が行くとか、何かしらここの間につながる人が誰もいなくて、彼の過去を知っている人が親しかいなかったっていうところが、それもすごく大きかったのかなと思います

ね。

（大口委員）

普通高校にするか高等養護学校にするかと悩む時に、考える一つがやっぱり就職のことですよね。高等養護学校に行ったら就職の範囲が狭まる、普通高校だったらやりたいことがあれば好きな所に行ける、そこが選択の悩むところですけど。高等養護学校から行けば、就職先もこれっていう風に、こういう配慮をしてほしいというのもできるんだけども、普通高校から行っちゃうと何も問題ない子に見られちゃうので、そこを引き継ぐというのは本当に難しいですよね。

（今西地域づくりコーディネーター）

そこが、彼が一人暮らしになった時につまづいたと言いますか、一歩が出せなくて立ち止まってしまったという、理由？というか背景と言いますか。皆さん何か感じる部分ありましたらお願いします。

（瀧澤委員）

やはり、就職の段階で何らかの引き継ぎだったりサポートが必要だったんじゃないかなっていうところが大きいかなと思います。あと、今だと携帯電話があるから誰かとつながれたりだとか、そこで相談相手を見つけたりとかできるのかなって思いますけど、この（事例の）時代は携帯がなかった時だと思います。（携帯の使い方が）いい方向に行くとそういうつながり、自分と同じような境遇の人を見つけて、関わり合えるのかなって。携帯電話は悪いつながり方になることもあるので、全てが良い方向に進むとは思いませんけど、当時はそういうこともなかったのかなって。自分以外の人との関わりは、弱音を吐く相手だったり、そういうのは必要になってくると思うし。お兄さんとの関わりも全くないんですよね、この方。幼少期に遡らないとお兄さんとの関係もないんだなってことを思いました。

（今西地域づくりコーディネーター）

家族の中で、ご本人さんへの関わりが見える家族っていうのはお母さんだけなんですよね。お父さんも距離を置いて遠くから発信する方で。今おっしゃったように、一歳違いのお兄さんとの関係と言いますか、そこの関係でもう少しやり取りするなり、弱音を吐くなり、そういう場面というのも、聞き出せなかったんですね。お話の中でも、お兄さんの名前は出てこない。お兄さんはもう就職して働いているんですけども、その存在はこの方のお話で全く出てこないんですね。男きょうだいで、年も近くて、でもお兄さんには何も言わなかったのかな、というのは私も感じたところでした。

（今西地域づくりコーディネーター）

それでは右のページ、その後家に戻ってからの彼のことに移りたいと思います。

ここでは彼が発信を始めたというのがありまして、精神科通院も自分で決めたということは聞いています。吐き気だったり、過呼吸だったり、家族の方はそういう場面を見なかったんですか？と聞いた時に、「家族の前では見せないようにしていたので、気がついていないと思う」という言い方でした。だから、家族にはそういう姿を見せていないんだという言

い方で、しんどくなると自分の部屋に行って過ごしていたと。家の手伝いもしていたんですけど、無理にやらされていたというわけではなく、ちょっと辛い時は「部屋で寝ていなさい」、とは言ってくれたみたいで、しんどいのに無理をして働いていたということはないようです。私はこの方が除雪作業している姿をよく見たことがあって、お母さんと一緒に町の高齢者事業団？に参加して、一生懸命頑張っている姿を見た記憶があります。

自分で病院を探して行ったということで、近くではなく離れた病院に行っていました。その時病院の方から、一般就労が難しいようだったら福祉的サービスからスタートしてもいいんじゃないか、という助言を受けて勧められたということで、相談支援事業所につながりました。役場のパンフレットを見て「相談をする所があるんだ」と知ったということで、最初は一人で相談の連絡がありました。その後、ご本人さんからお母さんに伝えられて、お母さんも心配で一緒に来たこともありました。精神科通院しているという部分で、福祉サービスの利用もできるという話をお母さんにして、その後 B 型事業所を紹介して、行ってみたら「ここで頑張ってみようかな」ということになりました。ただ、行き始めたらやはり B 型事業所で働くレベルではないよね、あなたは働ける力があるよね、ということで、職場も実習に出したんでしょうけど、本人はやっぱりしんどくなる、苦しくなって、「やっぱり自分は就職は無理です」となってやめてしまった、という経緯があります。資料の背景で「両親は、事業所の職場実習に物足りなさを感じていた」とありますが、「何でそんなところに行かなきゃいけないの？」「ちゃんと働けばいいでしょ」という言葉はあったようです。

その後、お医者さんから「一回検査してみた方がいいんじゃないか」ということで、初めて巡回相談に行ったのかな？幼少期の相談の履歴とかは分からないんですけれども、（知能）検査を受けることになって。そんなに高い数字ではなかったですね。手続きも相談員の方でやったんですが、総合相談所の検査を受けまして、療育手帳 B に相当するということで、療育手帳の申請をしたという流れですが、やはりご両親は、「手帳を持っていることを周囲に知られたくない」ということは随分とおっしゃっていて、「これは身分証明書ではないし、見せて歩くようなものでもないですよ」とお話したのを覚えています。

最後、ご本人さんから障害基礎年金の申請をしたいという相談がありました。何度かありましたね。私も何人かこの手続きはしていますので、本人さんからの依頼があったということで準備をしたり、病院への通院もしていて診断書もすぐ書いてもらえるという状況だったので、そんなに難しくなかったんですが。お母さんから連絡が入って、「今はしたくありません、やめてください」と。「年金手続きはしないでください」と、はっきりと言われました。で、「大丈夫です、この子の面倒は私たちがみます」ということで、その後段々と連絡が来なくなり、今は相談員の方には全く連絡は入っていません。ですからこの 10 年、40 歳過ぎてから 50 歳までのこの期間というのは、私も何回か連絡したことがあるんですが「部屋に一人でいます」という話でした。外に出れなくなりましたとか。無理はしないでねとか、通院してるの？というくらいでお話は終わっていますけれども、そうして現在に至っているというところです。

つながれなかったと言いますか、今現在は向こうからの発信も途絶えてしまっていて、私ももう少し何かできなかったかな？と思うところがあります。

（松田委員）

農家は続けているんですか？

（今西地域づくりコーディネーター）

農家は続けていますね。でも、お父さんお母さんももう高齢なので、そんなにできないとは思うんですけど。お母さんとは数回、お父さんはお会いしたことがないし、どういう家なのかなっていうのも分からないというのがあります。

（今西地域づくりコーディネーター）

やっぱり、すごい変化だと思うんですね。自宅に戻ってきてから、精神科通院があって、障がい者の相談支援事業所に相談をして、そして療育手帳と、前半の人生とは全然違う人生といいますか。急速に変わったというのはあると思いますね。

（石田委員）

後半の本人さんからの働きかけというのは、自分で自立に向けて動いているって行動だと思うんですけど。今でも子どもの発達支援センターを通うにしても、お父さんやお母さんはあまり偏見を持たないお家が多いんですけど、お爺ちゃんお婆ちゃんに相談をすると、やっぱり反対される、歓迎されないって子どももいて、年齢が上がるほど偏見があるイメージですかね、隠したいというか。ここの両親も似たような感じ、本人を隠したい、偏見から抜け出せないというか。だから、アプローチをするとしたら本人じゃなく、この両親なのかなと感じました。

（松田委員）

私も同じような事を思っていて、このご両親は我が子への期待がどうも大きいのかなと。それで親が「うちの子がこんなはずがない」というところで受け入れられなくなっている気がして。私、「引きこもりの人を何とか部屋から出そう」というプロジェクトの方からお話を聞いたことがあるんですけども、子どもだけじゃなくて周りも一緒にケアするというようなアプローチの方法を取っていたと思うんです。そういう意味で、やっぱり本人の方が自分から発信しだしたというのは大きな成長というか、そういうところがあると思うので、お母さんが相談員と面会したというその段階で、たとえばお母さんの方にもケアをするというか。子どもだけの問題ではなくて、両親の問題でもあるというような観点でケアをしていくと、少しずつでも両親の考え方っていうのは変わっていって、違う方向に動いていけたんじゃないかなという気はします。

（大口委員）

この、40 歳頃から年に一、二回、相談員に連絡が入っていたというのは、障害基礎年金についての相談というのが一つありますけど、そういうことだけじゃなくて、今の自分の苦しさを打ち明けるとか、そういうのはありましたか？

（今西地域づくりコーディネーター）

「親に迷惑をかけている」というのがいつもお話の最初に出てくることで、これ以上親に迷惑をかけられないとか、そういう発言は多かったですね。最初は「僕は年金の手続きができるんですか？」という相談だったので、できますよ、お家の方にもきちんと相談してくださいというところで、お母さんもこんな風に登場したんですが。

例えば別のケースなんですが、その方は今松田さんがおっしゃったように、ご本人さんはかなり発達の障がいが重かったので、非常にコミュニケーションが難しかったんですね。ですから、必ず親御さんを通さないと話が上手くつながらなかったり、状況が分からなかったので、すごく家族の方に入ったというケースもあります。ご本人さんじゃなくて親御さんと関わっていって、その方が外に出るようになったというケースもあります。ですから、そこここのケースバイケースではあるんですけども、確かにぷつっと切れてしまったケースではあるんですよね。気がついたら、そういえばこの前の電話はいつだった？というような。最終的には親御さんが「私たちが面倒を見ますから」ということでの、ばしっとした言葉だったんですね。「つながっていって欲しいんですよね」と言った時も、「いや、何かあったら来ますから」ということでシャッターを下ろされたみたいな、そういうのではありました。

（大口委員）

30 代の時は、本人が「何とかしなくちゃ」とすごい頑張って動き出したのに、そこを両親が、世間体があるからみたいな感じで、ちょっと足引っ張ってるみたいな気がしますよね。で、結局年金の申請ができなくなって、もう自分はどうしていいか分からない、どうしようもないみたいな感じなんでしょうかね。

（今西地域づくりコーディネーター）

携帯も連絡取れるようにはなってたんですけど、今はもうそれもつながらないですね。出てくれないです。私も、相談員一人が抱えるとかそういうことではないので、必ず光の里だったり役場の福祉課の方とも連携して、町にある自立支援協議会とかでケースとして、議題として出しながら。このケースだけじゃなくて、地域の方を地域みんなで支えていきましょうね、誰か、何か、できることはないですか？というような持って行き方はしていたんですけども。

背景を皆さんで、この時にどうだったんだろうねとか、こういう入り方はできなかったのかねとか。何かこう提案して…このケースを考えるだけじゃなくて、他にもこういうケースは地域にあるはずなので、そういう地域の問題として考えていけたらいいのかなとは思います。このケースの事例検討会ではないので。このケースを通して、この檜山という地域を見て行けたらいいなと思います。

（佐藤委員）

ひとつ、意見というか…どうしたらいいかなと思っていることなんですけど。

今ひきこもりをされているということで、18～19 歳で人間関係でつまづいて、苦しい思いをして、というのが背景にあると思うんですけど、私たちはやっぱり、一歩外に出てもらいたいとか、そういう風に願ってやっていることが、ご本人にとってはどうなのかな？って

いう視点も大事になってくるかなと。もしかしたら今幸せなのか、それとも苦しい思いをされているのか。10 年 20 年経った時に、どういう生活になるかっていうのも心配なところではあるんですけども。本人自体が、今どういう思いで生活されているかなってところが気になるんで。良かれと思ったこと、手を差し伸べたいと思ったことが、そのへんのバランスや兼ね合いといったものをどう捉えて、地域連携するかというところがすごく難しいなと感じたんですけれども。

（今西地域づくりコーディネーター）

これだけでご本人さんが不幸だということは言えないですよね、確かに。

（大口委員）

心配は心配ですよね。これってまさに、ご両親が「自分たちが面倒を見れる間は見る」ていう、じゃその先はどう考えているのかなっていうところですよね。

（菊池主査）

このケースがどうというわけではないんですけれど、こういうパターンのお家がどうなるかっていうのは、最終的には生活保護の方に話が回ってくることが多いです。8050 のケースというのが近年言われるようになってきたのは、介護サイド、介護サービスの事業所が 80 代の親御さんの様子を見に行ったら、50 代の子どもがいて、これは何なんだろう？と注目を始めたのが全体的なきっかけにはなるんですよ。今までは何とかできていましたよ、両親がそろって仕事もしてたり、両親二人で年金もらってて、そうすると息子一人いても何とか食べていけたけど、という。

パターンとしては、旦那さんが亡くなったら、お母さん一人では養いきれないと。そこで困窮して、息子がいるから食費も削って病院に行かなくなって、お母さんが健康状態が悪くなって、関係機関が「どうにかしないといかん」と介入するパターンというのがあるんですね。そうなると、両者で生活保護を家で受けるか。あと、親御さんが施設に入って、残された方が保護を受けるか。という風にどっちか転ぶというのが、まず一つですね。

もうひとパターンは両親ともいなくなるんですね。今までカツカツで面倒見ていたお母さんが、入院なり、亡くなって、親族が家を訪ねたら子どもが一人だけ残ってて、もうどうしようもないというか。その一人…50 代だとか 60…前ですね、働いて自立をするというのが生活保護のスタンスにはなるんですけども、仕事も何十年もしてないですし、実際にはちょっと望めないので、その中で本人の生活だけは守って、生活面の自立ですね、自分で一人暮らしを成り立たせるためにアプローチをするという形を取ります。なので最終的に、生活保護がセーフティネットとしてあることで引っかかって止まる場合もありますし、引っかからなくて本人がどうしようもないまま家で亡くなってしまうパターンというのも恐らくある、という感じになるかと思います。

特にそうですね、ここ何年かは…自分も去年まで檜山の生活保護の係でやってたんですが、年に何件かは絶対いるんですよ。地域的には檜山だけに限らなくて、渡島でもいましたし、渡島でも 8050 予備軍のような、行ったらお婆ちゃんがいて、息子が二階にいて…大体

二階にいることが多いです。で、下から呼びかけても降りてこないし、「行きますよ」と声かけて登って行こうとすると黙って上から物を投げてくるみたいなお家というのはちょいちょいありましたので。どこでつまづいたのかはその家によるんでしょうけど、色んな所に（似たようなケースが）あります。

（今西地域づくりコーディネーター）

今、地域生活支援拠点整備というのが、結局、親御さんがもう高齢になって介護が必要な状況で、そこに一緒に暮らしていたお子さんが障がいを持っていたら、その人たちの将来をどうするの？っていうところで、早めに支援しましょう、早めに対応しましょう、家族で何とか暮らしている間にその次のステージというのを支援していかなきゃいけない、というものがあります。本人たちは、親がいなくなったら施設に入ればいいって言いますが、そういうことではないので。やはり、在宅で暮らしていた方が施設で暮らすっていうのはなかなか難しいです。ですから、何とかその生活、本人が望む生活を何とか続けられないだろうかっていう部分で、早め早めの対応なり関わりを持つために、私たちコーディネーターは動いているんですが。ただ、それぞれの町でそれを整備しなければいけないですよね。そういう環境を作らなければいけない。それじゃ、そういう人たちが町にどれぐらいいるの？あそこのお家でどうなってるの？というところをまず把握しなければいけない。私たち相談員は相談に来る方が多いから今までの蓄積があって、「ここの家族心配だね」という家族って何件かピックアップできるんですね。一番良く知っているのは包括支援センターなり保健師さんです。介護に関わっている方々が、やっぱり「お家に行ったら障がい持ってる息子さんいたよね」とかそういう色々な情報を持っていますので、そういう情報を今収集して、名簿みたいなものを作成するというところで、それぞれの町もやっていると思うんですが。今金町はそうですね。そういう中で、「心配だね」と言っているお家に、本当に色んな課題が出てきた時、そういう人たちを早め早めにサポートする流れっていうのは必要なんだなというか。そういう形で、光の里にもお子さんをお願いしたりだとか、そういう家族が今ぱらぱらと出てきていて、障がいを持っているお子さんの支援をどうしようか、どうやって組み立てていこうかという点では、色んな社会資源がある町なら色んな選択肢が出てきますよね。そういう意味では、光の里にも随分と協力をいただいて、今金町はちょっと早めに動けているかも知れないです。やはり社会資源がそろっているので、早めには動けるのかなっていうところはあります。誰かがそこに気づいて、誰がそこに支援に入るのかを組み立てていくっていう部分では、やっぱり全体をサポートしていかなければいけないので、親もお子さんもという部分では、それぞれの町の自立支援協議会なんかが中心になって動いていっていただけると、そういう方を早めの支援につなげることができるかも知れない。

でも、本人たちが望んでいないところに入るのって本当に大変なんですよね。「私たち困ってないよ」ってばしっと言われちゃうと、もうそこで終わりですから。ですから、何とかつながっていくっていうところ、関わっていくっていうところからですね。二年、三年かかりますからね。そういう意味では 8050 問題と似てると思うんですけども、今それぞれの町

で環境を整えていきましょうっていう流れではあります。

佐々木さんは自分の将来とかすごい何か不安だなっていうところってあります？お父さんお母さんまだ元気ですもんね。

（佐々木委員）

今も実家のことが不安ではあるんですね。母さんも父さんも車椅子だし、婆ちゃんは足悪くて動けないから、冬の期間になると雪かきとかどうしてるのかな、とか。去年は母さん二、三回倒れて病院に運ばれているから。それもあるから、若干家のことが心配ですね。

（今西地域づくりコーディネーター）

将来的にはお父さんお母さんと一緒に暮らそうとか、そういう思いはないですか？

（佐々木委員）

帰るとは言われるけど、どのタイミングで帰っていいか分からない。

（今西地域づくりコーディネーター）

今はまだそういう気持ちにはなれないって感じかな。

（今西地域づくりコーディネーター）

一連の流れを通しまして、皆さんからたくさんご意見をいただいたんですけど、このケースだけでなく、自分の地域なりを考えた時に何か、皆さんが今思うこと、今日の感想でもあれば一言いただけますか。

（菊池主査）

この事例を見ていてですね、8050 問題というと、大体一般的には 50 代の子どもの方、男性が多いんですけど、50 代の息子の方がおかしいのではないか、という風に見られがちだと思うんですよ。ただ実際に今回の事例を見ると、本人が成人してから自分で頑張ってやろうとしているところが多いんですね。病院へ行くにしろ、手帳を取って年金を申請したいということにしろ。ただ結局保護者が、母親が最終的にはストップしてしまうとか、保護者の部分がネックになるパターンというのが多かったのかな、と。そういう意味では、80 と 50 のどっちが良い悪いっていうより、両方に問題があって、両者ケアですね、両方上手く成り立たせて行かないと難しいのかな、という感じがして。成人しても、子どものうちでも、その構図ってあまり変わらないのかなという感じがしました。

一応、我々は地域づくり委員会という形になるので、最終的には我々が「そうだね」って話だけで終わるのではなくて、色んな意見を踏まえて地域に下ろして、地域の困っているお家なりに役立ててもらいたいというのがありますので、次回以降はそういうアプローチになるんですけど、ここでまた色んな案や意見を出してもらえればと思いますので、お願いします。

（小野寺社会福祉課長）

今日は色々ご意見ありがとうございました。

本人の、なかなか周囲が向き合ったり受け入れてくれない状況を見ると結構苦しいのかなと思って、皆さんも積極的に意見を出していただいたのかなと。今金町は、先ほど言った

ように自立支援協議会とかあって、割と積極的な町ということもあるので、もしかしたらこういった問題が掘り起こされないような町も場合によっては出てくるのかなと思うので、色んな支援の可能性もありますけども、こういった状況が出ているっていうのも一つの方向性というか、支援の一つなのかなと思いました。先ほど主査（菊池）からも話がありましたけれども、こういった具体のケースで色々と意見をいただき、2年間で色々と議論をしていこうというところもありますので、組織的な対応なのか、家族に対するアプローチなのかは色々あると思いますけれども、こういった方を、どちらが本人幸せかというのはもちろんあると思いますけども、本人の思いを上手くくみ取ってあげるようなことができるように。それが組織的なものなのか、各町で体制を整えるのかというところはありますけれども、そういった点を考えながらこれからも議論していければなと思いました。

後、部長は別用務あって中座させていただきました。今日はどうもありがとうございます。

（松田委員）

私の中で何らかの結論みたいなものが出たわけじゃ全くないんですけども、最後の方に「それが本人が本当に望んでいるところか」っていうので、ちょっとハッとしたのが、私後見制度で後見人になったりするんですけど、その場合にも「意思決定支援」というのが今すごく重要視されていて、本人がどういう風に思っているかっていうのはやっぱり重要だよね、というのがあるんですね。周りがいくら良かれと思っても、本人が嫌だと思ったら、やはりそこは本人の能力が低くなっているとは言え、本人の意思を尊重すべきではないかというのもあって、そういうところも考えた時に、本人が「嫌だ」…その「嫌だ」というのも、必ずしも真摯な意思ではないのかも知れないけれども、少なくとも「嫌だ」と言っている時には何にもできないかも知れないけど、それがちょっとでも緩んだ時にはすぐさま手を差し伸べられるような、準備だけ整えておくっていうのがいいのかな、という風に思いました。

（佐藤委員）

小学校段階だと個別の支援計画でその子の良さだったり、逆に苦手にしているけどこういうことをしてあげると力が伸びますよ、ということを制度として積み重ねてきたんですけど、学校現場でもそこの扱いというか、学校（の対応）が違ったりしている場合もまだあると思うので、そのへんを含めてきちんとやっていって、それを引き継ぎしていくということで、「過去を知っている人がいない」という状況を生み出さない、というところはしっかりやっていかないといけないと思いました。

（石田委員）

引きこもりの件ですけど、今不登校の子どもがすごく多くて、不登校の子どものお家に訪問するということもしているんですけど、本人にとって幸せなのかというところですね。学校は学校に来て欲しいので何とかアプローチを続けるんですけど、本人にとっては今家に安心していられる状況なので、それが幸せだったらしょうがない、それじゃどうしたらいいのかっていうのはあります。こちらサイドとしては、安心できる場所で休息を…というのもありますし。早い段階で学校から連絡をもらって、保健師とかが関わることもできるので、

そういうケースについては今後も長く関わりを持っていけるので、高校卒業して就職した後も、誰にも相談できない、誰も気づかないということはないかと思うので、そういう関わりができるよう、小さいうちから連携していければと思います。

（大口委員）

あすなろの問題なんですけど、今全国的な問題になっていますよね。私は障がいのある方もそういう風になって暮らしますよというのは聞いていたんですけど、やっぱり子育ての件は気にはなっていたんです。そこもちゃんと支援しているんだろうなと思っていたので、あのニュースは衝撃的だったんですが、私たちが障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会をしているという部分ではすごい大事なところで、特に中学・高校にかけて性の問題というのは先生方もどう扱って、教えてあげればいいのかすごく悩んでいるところなんですね。なので、そのへん言える範囲でいいんですけど、道や振興局で「今はこういう状況なんです、こういう方向で考えているんです」とか、状況を説明してもらえたら嬉しいなと思います。

（小野寺社会福祉課長）

あすなろの件は、関係者や必要な方に対して調査を行っておりますが、監査中なので具体的にお答えするのは難しいという段階です。

（瀧澤委員）

今日の事例に対してなんですけど、幼少期の発見や気づきがやはり大事なのかなって思います。私自身の子どももそうなんですけど、保育園の先生から「右手と足に麻痺がある」と言われたんですけど、私は全く気づかなくて、「左利きだから右手は使わないんだ」っていう勝手な解釈をして、この子は左利きで良かったな、スポーツとか何をさせてあげようという気持ちでずっと子育てをしてきたんですが、保育園の先生に「何かちょっとおかしい」という指摘を受けまして。ただその時はまだ1、2歳だったので、私も全くそれを信じれなくて、先生にずっと熱心に伝えていただいていたんです。その後私も不安になってきて、病院に連れて行ったら、脳に異常があって麻痺が発見されたんですけど、やっぱりその時熱心に伝えていただいた保育園の先生によって、私も変われたし。はじめは信じがたい、信じれなかったのもあったので、そういう周りのサポートだったりが大事だったのかなって、後になってからすごく思います。この時は「何この先生言ってんの？」ていう反発だけだったので。なので、親としては隠したい、受け入れられないというのはあるのかも知れないですけど、周りのサポートだったりそれで気づいたことをご本人さんにも伝えて理解していただくっていうのが大人になってからも必要になってくるのかなって思いました。親に対してのサポートはやはり長く続けて、理解していただくのもすごく難しいと思うんですが、親が変わらないと子どももそれに従うものですしね。なのでご両親を変えていく、変えることによって子どもの気持ちなりが変わっていくんだろうな、と思いました。

（佐々木委員）

この先のこと、自分のことが段々不安になってきた。

（今西地域づくりコーディネーター）

色々とお話を聞いて心配になっちゃったかな？あなたの周りにはお話を聞いてくれる方がいるので、やっぱりそこは丁寧に、お話を聞いてもらうのがいいと思いますよ。

（今西地域づくりコーディネーター）

皆さんのご意見きかせてもらいまして、本当にありがとうございました。私も「つながっていきたい」というのが基本でして。どうしても先生方って小学校 6 年間、中学校 3 年間っていう短いスパンでの関わりだと思うんですが、その後も同じ地域に住んでいると先生方も心配して気にかけてくれたり、相談室にお話を持ってくるのも、先生方がすごく多いです。ですからそういう先生方の目、気づきというのは私たちもすごく参考になりますし、もちろん保健師さんも。私も何かあったら保健師さんに聞くんです。そういうつながりっていうのがとても大事なのかなっていうのを思っています。

私いつも反省するんですが、訪問した帰りに「何かあったら言ってね」ってすぐ言っちゃうんですよ。発信がなかなか難しい人に対しては「何かあったら言ってね」じゃないんですよね。「次〇〇なったら来るね」と言って帰るようにはしているんですね。やっぱり発信することの難しさだったり勇気だったり、そこは私たちは理解していかなきゃダメかな、っていうのは、この仕事を通して感じているところです。

（菊池主査）

みなさんありがとうございました。

今回、事例については回収をさせてただかないとならないんですが、皆さんけっこうメモを取られたりしていて、後で見返したい方も多いかと思うんですが…

（今西地域づくりコーディネーター）

そうですね、皆さん取扱いに気をつけていただいて。個人の名前が書いてあったり特定するような内容はないと思うので、取扱いには充分に配慮していただいて、お願いしたいと思います。

（菊池主査）

では、後で議事録を作成して皆さんにお渡しするんですけども、今西コーディネーターと調整して内容確認したいと思いますので。

他に今回、全体を通じて確認したい点、質問事項などありましたらお願いします…大丈夫ですかね。

では、次回は翌年度になります。時期は 7～8 月かな。その時にこの 8050 問題の、今回までに理解を深めてもらったのをベースに、新しい話し合いをしていければと思いますのでよろしくお願いします。今日はありがとうございました。